

東京から世界へ——映像表現の可能性をひらく。

映像とアートの国際フェスティバル「恵比寿映像祭2026」

プログラム詳細と参加アーティスト30組以上を発表、多様な光と声が響き合う16日間。

東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、日本経済新聞社は、映像文化とアートの現在を横断的に紹介する国際フェスティバル「恵比寿映像祭2026」を、2026年2月6日（金）から2月23日（月・祝）までの16日間にわたり開催いたします。

このたび、今回の総合テーマ「あなたの音に | 日花聲音 | Polyphonic Voices Bathed in Sunlight」のもと、光と声が重なり合う多層的な表現で構成される展示、上映、パフォーマンス、コミッション・プロジェクト、地域連携企画など、多彩なプログラムの詳細および見どころを公開いたしました。あわせて、国内外から参加するアーティスト30組以上と、その出展作品の概要も発表します。



左：張恩滿《蝸牛樂園三部曲—啟航或終章》（2021）高雄市立美術館蔵、右：侯怡亭《所有的小姐 Sáo-ū -é sió-tsiá》（2015）作家蔵

開催概要

恵比寿映像祭2026 「あなたの音に | 日花聲音 | Polyphonic Voices Bathed in Sunlight」

会期 2026年2月6日（金）～2月23日（月・祝） [16日間]

※2月9日（月）および16日（月）は休館

※3F展示室のみ3月22日（日）まで

時間 10:00-20:00（2月6日～2月22日）※最終日（2月23日）は18:00まで

※2月25日（水）から3月22日（日）の3F展示室は10:00から18:00まで（木曜・金曜は20:00まで）

会場 東京都写真美術館、恵比寿ガーデンプレイス各所、地域連携各所ほか

料金 展示無料（上映と一部イベントのみ有料）

主催 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／日本経済新聞社

共催 サッポロ不動産開発株式会社／公益財団法人日仏会館

助成 ブリティッシュ・カウンシル

協力 在日オーストラリア大使館

後援 台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター／J-WAVE 81.3FM

協賛 YEBISU BREWERY TOKYO／東京都写真美術館支援会員／ダイワロイネットホテル西新宿PREMIER

公式サイト <https://www.yebizo.com>

Instagram <https://www.instagram.com/yebizo>



総合テーマ

「あなたの音に | 日花聲音 | Polyphonic Voices Bathed in Sunlight」

いま社会は多様性の尊重を重視しています。しかし、人、文化や言語などの間にはたとえ共通点があったとしても、誤解、誤読は生じます。そして、戦争は止まず、格差は埋まらず、さまざまな摩擦の終わりが見えません。私たちはアンバランスで複雑な社会状況に直面しています。

恵比寿映像祭2026の総合テーマは、メインキュレーター・邱于瑄（Chiu Yu-Hsuan/チウ・ユーシュエン）による台湾語が起点です。台湾語は口承で広がった言語で、19世紀に生まれた発音記号や、20世紀の漢字表記の展開を経て、多くの文献が編まれました（その中には1931年に出版された、台湾語-日本語の辞書『台日大辞典』なども含まれます）。日本語とも共通点が多く、いくつかの表記法が混在している言語です。

「日花」¹（ジッホエ/Jit-hue）と「聲音」²（シアーイン/Siann-im）を組み合わせた台湾語は、ひとつとして同じものがないさまざまな声音が響く空間に、木々の間から洩れた光が差し込む様子を現します。私たちを取り巻く環境では、重奏するように異なる声が行き来し、多声的に折り重なって響いています。

私たちは、長い歴史の変遷によりさまざまな文化が積層した台湾の言葉を導線に、いまの社会に存在する多様な文化、言語などが互いに影響し合う複層的な形に柔らかく光を注ぐ思いで、恵比寿映像祭2026を構成します。

写真、映像、サウンド、パフォーマンスなどを通じて、不協であったとしても響き合い、重なり合う思考や存在が交差し、視覚的・聴覚的なポリフォニー³を深く形成していきます。個々の声や形は消されることなく、複数の視点が交差して拡張されます。美術館に留まらず、恵比寿地域の複層的な空間で出会う数々の作品を通じて、あなたの柔らかな思索をお楽しみください。

¹ 木洩れ陽。雲間もしくは木の間などより洩れ来る日光。『台日大辞典』より。

² 声音、音色、音、音声。

³ 複数の独立したメロディーが同時に存在し、互いに調和し合うことを意味する音楽用語。共同参加が可能な開かれた構造という概念として、現代では哲学や文化領域など、さまざまな分野においても応用されている。

見どころ

1. 重なり合う形と声：空間で触れる展示プログラム（会場：東京都写真美術館 B1F・1F・2F）

写真、映像、サウンド、パフォーマンスなど多様なメディアを横断し、人類学的な視点から「声」「環境」「記憶」「誤読」をテーマに展開する展示プログラム。長い歴史の中で交差してきた人や文化の往来を手がかりに、混ざり合う環境に潜む“聞こえにくい声”の広がりを見視化します。

地下1Fでは“移動”を起点にしたサウンドスケープが広がり、2F展示室では、言語や社会のルールを再考しながら「ズレ」や「誤解」から生まれる表現の可能性を探ります。展示室内外に響く形なき音が、視覚と聴覚のポリフォニーを立ち上げ、異なる文化や言語、身体の間で生まれる共鳴を体感させます。



鶴巻育子「人は影になる」(2024)



左：鶴巻育子《人は影になる》（2024）、右：田中未知／高松次郎 言語楽器《パロール・シンガー》（1974）東京都現代美術館蔵 Photo by Norihiro Ueno

参加アーティスト：張恩滿（チャン・エンマン）、鶴巻育子、トモコ・ソヴァージュ、キュンチョメ、FAMEME、田中未知／高松次郎、スーザン・ヒラー、アンジェリカ・メシティ、チョン・ソジョン、侯怡亭（ホウ・イーティン）、冥丁

FEATURED

・台湾原住民族のルーツを持つ張恩滿（チャン・エンマン）による船形のインスタレーション作品《蝸牛樂園三部曲—啟航或終章》ではカタツムリをモチーフに異なる土地を渡り定着してきた生き物の記憶と、変化し続ける環境のなかで未来へと受け継がれる姿を表現。

・侯怡亭（ホウ・イーティン）《所有的小姐 Sáo-ū -ê sió-tsiá》では、日本文化の影響を受けた台湾語の歌詞を刺繍として表現し、言語の背景にある歴史や社会の記憶を浮かび上がらせる。

・視覚障害のある人々への聞き取りを通して先入観や誤解というズレを手がかりに、「見ること」を問い直す鶴巻育子によるプロジェクト〈ALT〉。

・田中未知／高松次郎による言語楽器《パロール・シンガー》を、高松次郎のドローイングや寺山修司の関連資料とともに再構成する。

2. 新しい才能と出会う「コミッション・プロジェクト」（会場：東京都写真美術館 3F展示室）

東京都写真美術館の継続事業として、2023年に始動した「コミッション・プロジェクト」。日本を拠点に活動するアーティストを選出し、制作委嘱した映像作品を“新たな恵比寿映像祭”の成果として発表します。

恵比寿映像祭2026では、第2回コミッション・プロジェクト特別賞受賞作家である小森はるかによる新作展示を、総合テーマと呼応させながら具現化。ドキュメンタリーの歴史を受け継ぎながら、見過ごされてしまう風景や人の営みに丁寧に目を向ける小森の、新作2作品を展示します。会期中には第3回コミッション・プロジェクトのファイナリスト4名を発表します。



小森はるか《春、阿賀の岸辺にて》（2025）恵比寿映像祭2025コミッション・プロジェクト特別賞受賞作品〔参考図版〕

3. 街にひらかれるアート——オフサイト展示（会場：恵比寿ガーデンプレイスセンター広場、恵比寿スカイウォーク）

デジタルとアナログの境界を横断する実験的プロジェクトを展開。インターネット・アートの先駆者 エキソニモ、個人と集団のアイデンティティに着目したFAMEMEが、都市空間に新しい映像表現をインストールします。屋外でしか体験できない“偶発的な出会い”を生み出す作品群が、訪れる人すべてに開かれた鑑賞体験を提示します。



左：FAMEME《Duri-grance by FAMEME》（2026）Courtesy of the Artist、右：エキソニモ《Kiss, or Dual Monitors》（2017）東京都写真美術館蔵【参考図版】

FEATURED

- ・FAMEMEによるドリアンと香水の融合した新感覚の新作《Duri-grance by FAMEME》が、恵比寿スカイウォークをジャック！
- ・恵比寿ガーデンプレイスセンター広場では、目を閉じた人々の顔が映る二つのモニターが重なり合い、キスを交わしているかのように見えるエキソニモ《Kiss, or Dual Monitors》が登場。2026年の新バージョンでは、約4mに及ぶ巨大LEDウォールとして進化。東京都写真美術館2Fには、来場者が参加できる撮影ブースも設置されます。

4. 映像を“見る&聴く”—上映プログラム（会場：東京都写真美術館 1Fホール）

恵比寿映像祭のために編まれた特別上映プログラムを連日開催。劇映画から、実験映画をはじめ、日本初公開作品を含め多彩な作品が集まります。小森はるか作品は展示にとどまらず、上映の形でも展開します。上映後には、監督やゲストを招きトークを開催します。



左：河合健《みんな、おしゃべり!》（2025）©2025 映画『みんな、おしゃべり!』製作委員会、右：大木裕之《meta dramatic 劇的》（2023）東京都写真美術館蔵

FEATURED

- ・昨年急逝した映像作家・大木裕之の仕事振り返る追悼特集上映を実施。個人的かつ社会的な視点を往還しながら切り拓かれてきた映像表現の軌跡を、あらためて現在に接続する。
- ・河合健による言語とコミュニケーションのズレを題材にした《みんな、おしゃべり!》を上映。声や会話、場の生成をめぐり、コミュニケーションのあり方そのものを問い直す。
- ・モーガン・クウェインタンスによる短編特集上映。発話行為とイメージが合唱するように編み上げられる映像表現を通じて、政治性と詩性が交差する独自の世界を紹介する。

5. 重なり合う声と身体—ライブ・イベント（会場：東京都写真美術館 1Fホール、1Fスタジオ、展示室）

すべての来場者にひらかれたフェスティバルを目指し、映像文化の理解を深めるとともに、来場者が自ら考え、対話するきっかけをつくります。展示プログラムの各作品を起点にしつつ、様々な表現方法のプログラムが重なり合い、総合テーマのさらなる拡張を試みます。出品作家であるキュンチョメ、鶴巻育子、アンジェリカ・メシティによるアーティスト・トークをはじめ、日本大学名誉教授の原直久による写真技術に関する講義を行います。また、原住民文化を深く知ることができる関連ワークショップや、視覚障害のある方と作家による「見え方」についての作品鑑賞ツアーを実施します。さらに、形のないパフォーマンスや、美術館での音楽作品の特別演奏も開催。加えて劇団ゴツプロ!による演劇プログラムを取り入れ、映像の領域の拡張に挑みます。



左：ゴップロ！×喊劇場 共同制作《敬啓者》（拝啓）（2025）Photo by Rosaline Lu, Courtesy of 山喊製作設計、右：トモコ・ソヴァージュ（WOSxSONEGにて、2018）Photo by Leo Lopez, Courtesy of the Artist



張恩滿によるワークショップ [参考図版] Courtesy of the Artist and Singapore Art Museum

FEATURED

- ・劇団ゴップロ！×喊劇場による《敬啓者》（拝啓）を上演。台湾と日本、戦後史の狭間で交錯した7通の手紙が、これまで語られなかった人々の声をすくい上げる。
- ・トモコ・ソヴァージュによる、水と器、身体の関係性から立ち上がる音のパフォーマンス《Waterbowls》。
- ・アンジェリカ・メシティ、キュンチョメ、鶴巻育子、原直久ら出展作家によるアーティスト・トークを開催。
- ・張恩滿（チャン・エンマン）による台湾原住民族文化を体験するワークショップや、鶴巻育子による「見ること」についての写真鑑賞ツアーを開催。

timetable	2/6 金	2/7 土	2/8 日	2/10 火	2/11 水	2/12 木	2/13 金	2/14 土	2/15 日	2/17 火	2/18 水	2/19 木	2/20 金	2/21 土	2/22 日	2/23 月
11:00																
12:00																
13:00																
14:00																
15:00																
16:00																
17:00																
18:00																
19:00																
20:00																

6. 語り合う——シンポジウム（会場：東京都写真美術館 1Fホール、日仏会館ホール）

国内外のキュレーター、研究者、アーティストらを迎え、コミッション・プロジェクトやアーカイブ、言語と文化の交差について議論し、映像の未来をめぐる国際的な知の交流の場を創出します。総合テーマに沿って、映像や写真に関する多文化的な視点、言語の役割、そしてコミッション・プロジェクトおよび映像アーカイブを深く掘り下げます。4つのテーマを設け、国内外から多彩な登壇者を迎えたシンポジウムを通じて、映像、写真と音を持つ多義性と可能性を多角的に考察します。

PROGRAM SCHEDULE

テーマ：映画・映像における多声的な言語

日時：2月8日（日） 13:00–15:00

[パネリスト]

キャメロン・L・ホワイト／メー・アーダードン・インカワニット／三澤真美恵

テーマ：映像表現の現在地とこれから——第3回コミッション・プロジェクトに向けて

日時：2月11日（水・祝） 15:00–17:00

[パネリスト]

沖啓介／斉藤綾子／レオナルド・バルトロメウス／メー・アーダードン・インカワニット

テーマ：受け継がれるデジタルの声——マイグレーション、エミュレーター、そしてエコ

一日時：2月15日（日） 15:00–17:00

[パネリスト]

千房けん輔／赤岩やえ [エキソニモ]

マイケル・コナー

※このシンポジウムは東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団による「TOKYOスマート・カルチャー・プロジェクト」の一環です。

テーマ：あるがままの音へ

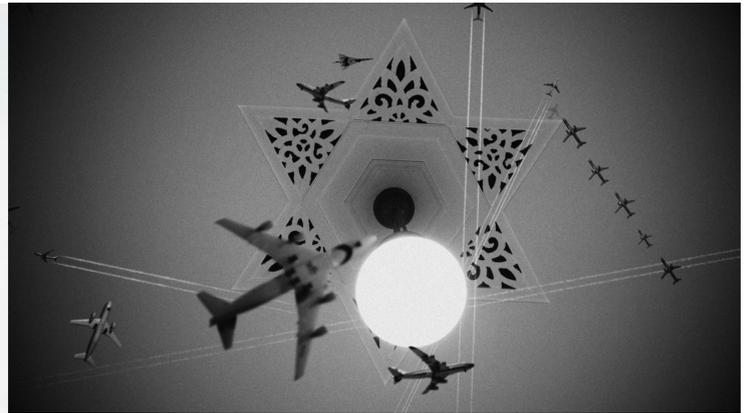
日時：2月18日（水） 18:00–20:00

[パネリスト]

トモコ・ソヴァージュ／東岳志／柳沢英輔

7. 東京都のコレクションを特別公開（会場：東京都写真美術館 3F展示室）

東京都コレクションから、総合テーマ「あなたの音に | 日花聲音 | Polyphonic Voices Bathed in Sunlight」を紐解く視点として、「現代と歴史」を切り口に作品をセレクト。東京都写真美術館をはじめ、東京都現代美術館、東京都庭園美術館、東京都江戸東京博物館が管理する収蔵品の中から、映像・写真・資料を展示し、漣（さざなみ）のように立ち上がる違和感をリレー形式であぶり出します。



左：全日本写真材料商組合連合会《カメラ双六》（昭和中期）東京都江戸東京博物館蔵、右：さわひらき《pilgrim》（2022）東京都庭園美術館蔵

FEATURED

- ・東京都写真美術館コレクションより、エキソニモ《Joiner – Collage Camera》（2010）をマイグレーション（修復）作品として展示。
- ・十返舎一九『東海道中膝栗毛』（1802–1814）を起点に、昭和中期の《カメラ双六》を展示。双六と写真文化の関係をたどる。
- ・東京都庭園美術館で撮影された、さわひらきによる映像作品《pilgrim》（2022）を、1933年竣工時の《朝香宮邸竣工写真》とともに展示。建築に重なる時間の層を浮かび上がらせる。

8. 文化が響き合う都市ネットワーク——地域連携プログラム（会場：地域連携各所）

恵比寿映像祭2026では、地域連携の範囲をこれまで以上に拡大し、恵比寿近隣の文化施設が多数新たに参加します。日仏会館、CCBTをはじめとする18施設が、それぞれ独自の展覧会やイベントを開催し、街全体でフェスティバルを盛り上げます。さらに今年は、恵比寿屈指のディープスポット「恵比寿 地下 味の飲食街」や、恵比寿エリアの複数のバーとも連携し、昼から夜まで恵比寿の街全体を巡りながら、多様な作品と出会うことができます。また、シールラリーも実施し、シールを集めると映写機から生まれたキャラクター「ye(b)izoちゃん」オリジナルグッズを先着でプレゼント。アートを通して街を歩き、地域文化を再発見する体験を提供します。



ye(b)izoちゃん ©ひらのりょう

会場について

①東京都写真美術館

展示（コミッション・プロジェクト含む）

上映、ライブ・イベント、シンポジウム、教育普及プログラム

②恵比寿ガーデンプレイス各所（センター広場、スカイウォーク）

オフサイト展示

③恵比寿地域文化施設およびギャラリーなど

地域連携プログラム



アクセシビリティ & サポート

乳幼児から高齢者まで、障害のある人もない人も、海外にルーツをもつ人も、だれもが楽しめる恵比寿映像祭を目指し、さまざまなサポートをご用意しています。

来館前の参考にアクセシビリティ情報ページ「だれでもTOP」をご覧ください。

https://topmuseum.jp/contents/pages/universal_accessibility_top.html

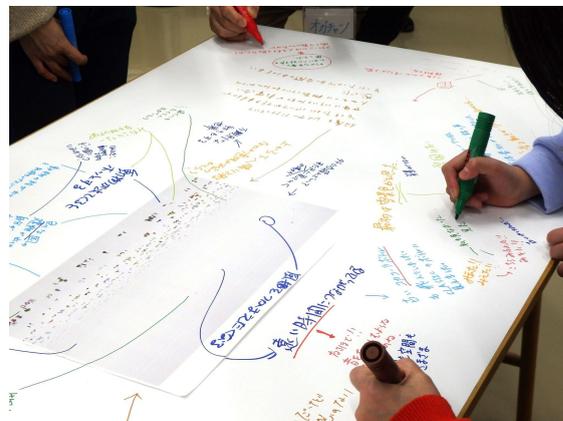
- ・ 情報保障
- ・ 音声による「やさしいガイド」
- ・ オール・ ウェルカム・ デー（2月14日 [土] 13:30-17:00）
- ・ バリアフリー設備
- ・ 総合受付のサポート

多言語：英語・中国語・韓国語（毎日）、日本手話（金土日祝）など

教育普及プログラム

恵比寿映像祭2026では、さまざまな世代の方々がフェスティバルをより楽しめるよう、教育普及プログラムを多数用意しています。これらのプログラムでは、お気に入りの作品を見つけたり、フェスティバルについて考えたり、制作を通して映像や写真についての理解を深めたりすることができます。事前申込制のものだけでなく、当日映像祭鑑賞途中にふらっと立ち寄れるものなど、皆様のご都合に合わせてご参加いただけます。プログラム詳細は公式HPをご確認ください。

※すべて日本語での実施 [参加費無料]



参考画像：ダンス・ウエルの様子、筆談鑑賞会の様子

恵比寿映像祭とは

恵比寿映像祭は、平成21（2009）年の第1回開催以来、年に一度恵比寿の地で、展示、上映、ライブ・パフォーマンス、トーク・セッションなどを複合的に行ってきた映像とアートの国際フェスティバルです。映像分野における創造活動の活性化と、映像表現やメディアの発展をいかに育み、継承していくかという課題について広く共有する場となることを目指してきました。近年では、地域とのつながりや国際的なネットワークを強化し、一層の充実と発展をはかっています。

<プレス問い合わせ先>

恵比寿映像祭2026事務局（エイベックス・クリエイター・エージェンシー株式会社）

担当：村田

電話 03-6714-5476 / E-mail yebizo@av.avex.co.jp